

「リチウムディシリケートガラスセラミック
を使用した
フェイシャルカットバックテクニックと
ノンアジャストインレーの製作法と勘所」

筆者が歯科技工士免許を取得し20年が経とうとしている。その間、オールセラミックと呼ばれる審美材料は審美性に加え高い強度が修復材料に求められるようになり、マテリアルも多様化しPressセラミックはもとより、アルミナ・ジルコニアと高強度なマテリアルへと進化を遂げて来た。

オールセラミック修復における接着歯学や材料学の様々なエビデンスの蓄積と臨床実績の積み重ねにより、支台歯の色調や欠損歯数等の条件によるマテリアル選択基準や審美獲得のためのテクニックも確立されたと思う。

筆者は、審美修復治療の選択肢としてジルコニア修復全盛の時代ではあるが、我が社におけるPressセラミックワークの中で主となるのはカットバックを行ったフレームに対してのレイヤリングワークであるが、ステイン技法のインレーやアンレー・クラウンなども少なくはない。しかしPressセラミックでのインレー製作は、各ラボにおいてルーティンワークであることは事実であるが、適合作業に時間を取られ、思いの外難易度が高い技工作業だと筆者は考える。我が社では初心者でも熟練者同様の適合が得られるようインレー製作時におけるシステムが確立されており、本講演では高強度リチウムシリケートガラスセラミックスを用いて、透過性を利用し支台歯の色調を活かした症例や、変色支台歯やインプラントケースなどマスキングが必要な症例に対するインゴット選択基準の解説と共に、高強度フレームを活かしたカットバックデザイン『フェイシャルカットバック』法を使用し、明度のコントロールや透明感を再現するための築盛法方に加え、筆者が行っている内面無調整インレー製作法について解説したいと思う。